

2 学習の様子を見取る

☆観点別学習状況の評価の総括

観点ごとの評価の総括の場面は次の3段階であることが多いと考えられます。

①単元（題材）における総括

②学期末における総括

③学年末における総括

評定への総括の方法については各学校で共通理解を図ることが大切です。

【参考資料】

- ・「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
(国立教育政策研究所)
- ・「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」
(国立教育政策研究所)
- ・「学習評価の手引き」※
(神奈川県教育委員会)

→ ※のダウンロードはP122へ

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

見取りのヒント

評価（C）の生徒がどこでつまずいているかの視点で見取ることが大切です。生徒の読む・書く・話す・作業・集中・学習用具の用意・情緒の安定、などを考えてみましょう。



つまずいている生徒への手立て

学習の様子を見取りながら、具体的な手立て、他の資料や解答のヒントを提供する等の手立てを講じます。

つまずいている生徒が多い場合には、設定した（B）の規準が適切であったかについても、見直す必要があります。

Q1: 「小テスト」は全て成績に反映させるの？

知識の定着を図るため、毎時間授業の中で小テストを行っています。一年間を通して行うので膨大な量になり、処理が大変です。この結果は全て記録に残す評価として評定に反映させるのですか。

A1: 必ずしも「全てを」反映させなくてよい

もちろん、全ての結果を「知識・技能」の評価としても構いませんが、その処理に「時間と労力を掛けすぎない」ようにすることも重要です。

例えば、日頃の単語テストを「指導に生かす評価」として活用し、単語に関する「知識・技能」の総括的な評価は定期テストでまとめて実施する、という方法も考えられます。その際、何を「記録に残す評価」とするのかを事前に生徒に説明することが必要です。

Q2: 「対話的な活動」の評価はどうすればよいの？

「思考・判断・表現」の評価場面で、グループでの話合いに参加しない生徒がいます。この生徒の観点別学習状況の評価はどうするのがよいのですか。

A2: 生徒の取組状況は「指導に生かす評価」に活用する

「よりよく話合いをする」ということが単元の目標になっていない限り、質問のような「生徒の取組状況」自体が観点別学習状況の評価の対象にはなりません。

例えば理科の授業で、実験レポートをより良くするために、実験結果の考察をグループで共有する活動を行ったとします。ここで評価の対象となるのは完成した実験レポート（成果物）であり、グループでの話合いの様子（取組状況）ではありません。

もちろん、実験レポートの内容を充実させるためには、グループでの話合いの充実が必要です。そのためには、活動に参加しない（できない）生徒に対し、参加する（できる）ように促す、助言するといった指導や支援（「指導に生かす評価」）が必要となります。

Q3: 「主体的に学習に取り組む態度」は何を評価するの？

遅刻や欠席の多い生徒がいます。また、行動に課題があり、活動に参加しない生徒もいます。こういった生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の評価を「C」にしようと思っていますが、問題はありませんか。

A3: 学習を通して育まれた「教科の学習に即した態度」を評価する

「主体的に学習に取り組む態度」を生徒の日頃の授業態度を評価するものと捉えているケースがありますが、これは大きな誤りです。「主体的に学習に取り組む態度」は、各教科の学習に即した態度を対象としており、質問にあるような、生徒の性格や行動の傾向を評価するものではありません。

一般的に、単元の最後に行う振り返りで「何を学んだか」「学んだことをどう使うか」といったことについてワークシートに記述し、各教科の学習に取り組む態度を捉える、ということが行われています。なお、「主体的に学習に取り組む態度」については、4章-3に詳しく説明されています。